

## 作家・北杜夫と躁うつ病

### — 顕在発症前エピソードと『どくとるマンボウ航海記』 —

高橋 徹 (信州大学医学部精神医学教室)  
松下 正明 (東京大学名誉教授)

〈要旨〉作家・北杜夫（1927-2011年）の双極性障害は、39歳時の躁病エピソードが初発とされているが、それ以前の時期にも、気分変動が存在していた可能性がある。本論では、この顕在発症前の時期に焦点をあて、その精神状態と創作との関連性を考察した。辻邦生との往復書簡集を主な資料として、『どくとるマンボウ航海記』執筆前後の1959-1960年（32-33歳）頃の精神状態を推察した。この時期には既に、躁状態やうつ状態もしくは混合状態を呈していた可能性が高く、これらの精神状態が初期作品の創作に大きく関与しているものと考えられた。特に意欲・活動性のベクトルが上昇に転じる「うつ病相（うつ状態）の後期」が、執筆活動には適した時期であった可能性を指摘した。また同作品が、それまでの文壇にはなかった独自性と新規性を有していることにも言及した。

#### 1. はじめに

筆者らは、作家・北杜夫（本名：斎藤宗吉）の「躁うつ病」の病名が、現代の精神科診断基準に照らし合わせて、「双極性障害（双極Ⅰ型障害）」と同義と考えてよいことを確認し、また病歴からは、「急速交代型」「混合状態」の特徴を有した時期があったと考えられることを指摘した（日本病跡学雑誌掲載）<sup>55)</sup>。それを踏まえて本論では、顕在発症とされている初回の躁病エピソード（39歳時）より前の時期に焦点をあて、その時期の精神状態を検討する。北杜夫を対象とした精神医学研究は少なく<sup>51)</sup>、発症時期に関しては、精神科医でもある北杜夫による「最初の躁状態」（1966年：39歳時）との自己評価に基づいて全ての年譜が作成されてきた<sup>17, 19, 45)</sup>。この自覚的に明らかな躁病エピソード以降を双極性障害の罹患期間とするのに筆者らも異論はないが、一方で、それより前の時期にも気分変動が存在していた可能性を指摘しておきたい。またそれが初期作品群の創作に少なからず影響を与えていた可能性もあり、顕在発症とされてきた時期より前の精神状態を検討することは、北杜夫の病跡学研究を進めるにあたって大きな意義があると考え<sup>51)</sup>。

例えば、もっとも身近にいた喜美子夫人は、北杜夫の「うつ病」について、以下のように語っている。

「うつ病のときは朝起きる時間が遅くなります。突然口をきかなくなりますし。最初うつになった頃は、庭の方をぼうっと眺めていましたが、私は作品のことを考えているんだろうと思い込んでいたのです。私もその頃は躁うつ病なんて知りませんし。うつときは会話もなく、まさ

に『消沈』という状態でした」<sup>29, 43)</sup>

さらにこの喜美子夫人の指摘を、長女の斎藤由香氏は、父・北杜夫との対談で、直接本人に問うている。

「由香：私は小学校1年の夏にパパが躁病になったと思っているんだけど、ママは意見が違みたい。私が幼稚園のときにパパがずっと庭を見ていて、話しかけても反応がなくて、ひたすら静かにしているので『小説の構想を練ってるんだわ』と思ってたみたいね。ただ、『今にしてみれば、あの頃、ぼんやりと庭を見ていたのはうつ病だったんじゃないかしら』って、最近ママは言うの。私的には小学校1年生の夏、軽井沢から帰ってきて、9月1日に学校が始まるときに、新聞に『喜美子のバカ、喜美子が先に寝やがるから、俺様は蚊に食われたじゃないか!!』って書いて食卓に置いてあったわけ。それが始まりだと思っています<sup>注2</sup>。(中略)『映画をつくりたい。映画をつくるためには相当の資金が要るから、今日から株の売買をします』とか言い始めて、証券会社と株をやるようになった。でも、ママいわく、私が幼稚園の頃、パパが庭をぼおーっと見てたのはうつ病だと。でも、私的にはこの9月がスタート。パパ的にはどっちが先なの？ ママは7月頃から人が変わったみたいになったって言ってたけど。

北：いや覚えてないね。

由香：でも、まさか、自分が躁病になると思った？

北：いや、思わなかったね(笑)」<sup>26)</sup>

## 2. 検討資料

初回の躁病エピソードである39歳(1966年)より前の精神状態と創作を知るうえで参考になる資料は、①1965年以前に創作・出版された北杜夫の著作、②1965年以前の北杜夫自身のことを著したエッセイ、③1965年以前に書かれた日記や手紙、などがあげられる。

①の「1965年以前に創作・出版された北杜夫の著作」には、『幽霊』『どくどるマンボウ航海記』『夜と霧の隅で』『羽蟻のいる丘』『遙かな国 遠い国』『あくびノオト』『どくどるマンボウ昆虫記』『南太平洋ひるね旅』『船乗りクブクブの冒険』『どくどるマンボウ小事典』『へそのない本』『楡家の人びと』『みつばち ぴい』『牧神の午後』『高みの見物』の15冊がある。なかでも北作品の代表作ともいえる『幽霊』(1954年：自費出版)『どくどるマンボウ航海記』(1960年)『楡家の人びと』(1964年)がこの時期に創作・出版されている点は特筆に値する。これら作品のなかで、当時の精神状態を垣間みられる作品は『どくどるマンボウ航海記』(1960年)<sup>8)</sup>であり、31歳当時の照洋丸での航海中<sup>注3</sup>の様子を作中の文章から推測することができる。

②の「1965年以前の北杜夫自身に関することを著したエッセイ」は、自身の幼少期、青年期を振り返って書かれた数多くの作品(マンボウ・シリーズ)が該当するが、代表的なものとしては『どくどるマンボウ青春記』(1968年：41歳時刊)<sup>11)</sup>『どくどるマンボウ追想記』(1976年：49歳時刊)<sup>16)</sup>『どくどるマンボウ医局記』(1993年：66歳時刊)<sup>21)</sup>がある。思春期・青年期における数多くの逸話が記されており、当時の精神状態を類推できる貴重な資料である。ただし作品自体

は、中年期以降に発刊されており、回想という形式をとっている。

③の「1965年以前に書かれた日記や手紙」としては、20-30歳代に書かれた日記・手紙を書籍化した『或る青春の日記』(1988年)<sup>20)</sup>『若き日の友情 辻邦生・北杜夫往復書簡』(2010年)<sup>27)</sup>が該当する。これらは、その当時に書かれた日記・手紙をそのまま活字化しており、リアルタイムで書かれた生の記録である。『どくとるマンボウ青春記』『どくとるマンボウ追想記』などの作品は、1945年6月に書き始めた高校時代の『憂行日記』などを基に、北杜夫が回想して著したものである<sup>46)</sup>。

本論でもっとも注目した資料は、『若き日の友情 辻邦生・北杜夫往復書簡』<sup>27)</sup>である。これは旧制松本高校時代からの親友である作家・辻邦生(1925-1999)<sup>註4)</sup>と北杜夫との間でかわされた手紙を活字化し、編纂して出版したものである(辻が死去後の2010年に、妻・佐保子夫人と北杜夫が資料提供する形で単行本が発刊。北杜夫が死去後の2012年に、新たに発見された書簡を追加した文庫版が発刊)。1948年(20歳)から1961年(34歳)までに交わされた180通を超える書簡を収録し、当時の北杜夫の主観的な心情と北杜夫に対する辻邦生の客観的な評価が書簡という形で検討できるものであり、北杜夫研究において第一級の資料と位置づけてよい。

以下に、この『若き日の友情 辻邦生・北杜夫往復書簡』<sup>27)</sup>に収録された書簡を時系列にそって抜粋しながら考察を進めていくことにする。本研究は、信州大学医学部医倫理委員会の承認を得ている(no. 3477)。敬称は略させていただいた。

### 3. 『若き日の友情 辻邦生・北杜夫往復書簡』<sup>27)</sup>

#### 3-1. 第一章 (I : 1948年3月10日~1957年9月27日)

この時期の要約が、本章扉にある次の文章。「1948(昭和23)年3月、辻邦生22歳、北杜夫20歳。東北大学医学部を目指す北から、出席日数不足で松本高校に留まることになった辻を案じる手紙が届く。翌年、辻は東京大学文学部仏蘭西文学科に入学する。二人は、ともに文学修行を積んでいく。1950(昭和25年)年、北は、『狂詩』が『文芸首都』に掲載されると、同誌の同人となり、『幽霊』の執筆も始まる。1953(昭和28)年、辻は結婚、評論や翻訳の仕事を始め、1957(昭和32)年には、妻・佐保子と共にパリに渡る。」

#### 1948年6月12日 : 北(仙台) から辻(松本)宛

「下宿移りました。長い間御無沙汰してしまひました。もう何をするにもズク<sup>註5)</sup>が抜けてしまひ、そのくせ外界、内界、事件多々なのですが、書くとなれば非常な努力を要し、とても今の状態では書く気になりません。(中略)松島へもどこにも一ぺんも行きません。トニオ・クレエゲルは小説としては実に初めて僕に猛烈に作用しました。実際これくらゐしか書く気がしないので失礼します。体は別に病気でもありませんから御安心を。お元気で。辻大兄」

この一文をもって「抑うつ状態」とするのは早計であるが(青年期特有の精神状態として了解可能であるが)<sup>註6)</sup>、北杜夫が自身の意欲減退感に言及し、それを辻邦生に報告した手紙である。

#### 1948年10月5日 : 辻(松本) から北(仙台)宛

「御はがき有難う。君と別れてからも君の不可思議な性格からの呪縛は強い。それは魔術師に絡

む呪縛。陶醉と甘美と、そして妙に肌ざはりの悪いカメレオンの戦慄、一種の嫌悪と、その反極の、誘惑への遅緩、無邪気と悪徳の二重映し、神と悪霊の巧みな同居。だが、そのフモールに慣えるのは僕ばかりではあるまい。」

文学青年の多少誇張された文章として理解するにしても、辻邦生がこの時期すでに、二つの極を同時に併せ持つ北杜夫の性格特性を指摘していた点と、後にいかに発揮される北杜夫のユーモア（ラテン語・ドイツ語でフモール：humor）に言及している点は興味深い。

#### 1949年3月：北（仙台）から辻（東京）宛

「なにはともあれ、なまけぐせは身に沁みこみ、夢想は現実以上に現実的なので、ラテン名のラレツなど大脳皮質はてんでうけつけてくれません。夜半毎に発狂の恐怖（大げさでない、断じて）を感じ、無理にも清らかだった？日々を思い出すのです。（中略）ともあれ、僕はさう全部白紙答案を出すわけには行きません。敬愛する茂吉君のためにも——。」

「大げさでない、断じて」との本人の注釈はあるものの、この「発狂恐怖」の記述をどこまで重くとらえるべきかは判然としない。医学部の試験前の切羽詰まった精神状態であったこと、小説『狂詩』<sup>註7</sup>の執筆時期であったこと、あるいは北杜夫特有の誇張した表現である可能性などは踏まえる必要がある。

#### 1949年6月18日：北（仙台）から辻（東京）宛

「最近トミにイウウツになり、背骨が痛むまでピンポンをすれど、くだらない映画をみれど、今川焼を食へど、更々心は安らかにならないのでいささか参ってゐます。小説は書かない。敢えて書けないとは言はないけれど、当分ロクなものは書けないとツクヅク悟ったのでホウキしてゐます。タマに詩を作るけど、こっちの方がまだ何とかなりさう。でも此处一週間は、廢疾者のやうな日々を送りました。」

「イウウツ」（憂鬱）という表現が含まれた一文である。同年9月6日の辻宛の葉書にも、帰京時の状態として、「非常に消耗してゐて精神状態も弱まってゐるため、なにも話せないかも知れませんが。」とある。また9月24日の手紙には「疲れが直れば、恐らく僕は元気になれる積りです。」とも記している。

#### 1950年4月25日：北（仙台）から辻（東京）宛

「相変わらずスランプですが、怠惰は排除せねばなりませんから、悪戦苦闘の有様で一枚二枚と進めてゐます。しかし調子悪い時は、速度こそ遅くはないのですが、快調の時と比べると、文章の光沢からしてかうも違ふものかと思はせます。」

北杜夫が小説の原稿を書き進めていく様子を報告しており、了解可能な内容だが、後年の躁鬱状態での執筆を連想させる記述である。

#### 1954年5月7日：辻（東京）から北（東京）宛

「“幽霊”最終回をいただきました。何はともあれ、これだけ〔のもの〕を完成させたこと、立派だと思います。（中略）抒情的気分と一種の形而上学的な瞑想的な調子のところは、流石にマンの息子らしく、気品があり、僕も好きなせいか、何度も読み返しました。」

『幽霊』は1953年から54年に文藝首都で連載され、北杜夫はこれを1954年に自費出版した。本

作を奥野健男（文芸評論家）は高く評価し、奥野は北杜夫の才能を宮脇俊三（中央公論社編集者）に力説、それが『どくとるマンボウ航海記』<sup>8)</sup>の執筆へとつながる<sup>35,39)</sup>。さらにその成功により、『幽霊』は「ある幼年と青春の物語」の副題をつけて、1960年に中央公論社より出版された。そのような流れとは別に、辻邦生は最初期に北杜夫の作品を読み、それを称賛した。当時は投稿しても不採用となる作品が多く、ときに酷評されることもあり、前向きな批評と評価を示し続けた辻邦生の存在は、北杜夫にとって精神的に大きな支えになっていたものと想像される。

#### 1955年3月29日：北（東京）から辻（東京）宛

「(中略) それから僕はメッタにないほど酔ったらしく、凶悪になり、やたらにケンクワをふきかけ、しまひかけのバーにチン入して売上金をうばはうとしたりしたらしく、非常に彼にメイワクをかけました。(中略) 自分がギャングのボスになったと錯覚したらしく、あとで思ひだすだけでもリツゼンたるものあります。」

新宿で偶然にあった知人と飲酒した際の病的酩酊状態を辻邦生に報告している。旧制松本高校時代にも酔って二人の教授を殴る事件を起こしており、後年も飲酒時のエピソードは多い。この先の書簡では、辻夫妻から北杜夫に、節酒を勧める内容が幾度もでてくる。

#### 1956年4月：辻夫妻（東京）から北（甲府：山梨県精神病院）宛

「こないだ堀内さんからハガキが来て、宗吉先生（ユウレイではない）を、慶応でみかけたら、何だかおかしいことを口走っておいでになったと書いてありましたので、“コレハイヨイヨイカレタナ” と思って心配しました。(中略) あんまり無理をなさらぬよう。それでは又。サヨナラ」

辻邦生の手紙の末尾に書かれた妻・辻佐保子から北杜夫への一文。慶應義塾大学病院神経科の同門である堀内秀（作家・なだいなだ）は、北杜夫との対談で、「(当時の北が)『おれも30(歳)になったぞ』なんて言って(医局で)わめいていた」と語っている<sup>31)</sup>。ほかに北杜夫のおかしな言動としては「独語癖」<sup>註8)</sup>があり、堀内が他の医師と文学談義をしていたところ、唐突に「けしからぬ」と北杜夫がつぶやいたという逸話がある<sup>18)</sup>。

### 3-2. 第二章（Ⅱ：1958年11月14日～1959年4月12日）

本章扉の文章。「1958（昭和33）年、北はマグロ調査船の船医としてシンガポール、スエズを経てヨーロッパへと向かう。パリに住む辻夫妻のもとへ、寄港地から投函された北の手紙が届く」

#### 1958年11月28日：北（シンガポール）から辻（パリ）宛

「今、とても元気だが、船ヨイで威張りすぎたので、附記するが、とにかく自信にみちて、もうシケもおさまったころ、ゲザイをのんだところ、これが分量をまちがへて、一日中ダメ、このときばかりはさすがの白骨船長も吐息をついたのでありました。では、元気で。病気にならぬよう。船には薬ウントあるから、一寸した病気ならなほしてあげる。できたら迎えにきてください。フランス語はやはりアーベーもよめませんから。会える日を心まちにしつつ。」

「とても元気」「自信にみちて」は、まずは正常心理の範疇でとらえるべきだろうが、後述する躁状態との関連性を指摘しておく。

#### 1959年2月25日：辻（パリ）から北（ジェノヴァ）宛

「サン・ラザール駅は前にも早朝ひとを送ったことがあって、その日も曇った暗い日で、淋しいやァな気持がした。今朝、汽車が曲がって見えなくなると、急にがっかりした。(中略)『谿間にて』で僕が願うのは、やはり採取人の心の動き、情熱の迫真度が、妙に他の部分とちがって薄いから、その点をもう少し強くしたら、ということだ。(中略)前にも書いたように、今、空漠の思いでどうにもならぬ。すこし手紙でも書いたら癒えようかと、こんなことを書いてみた。しかし、『会える』ってことはいいことだなあ。涙がホロホロでてるよ。さよなら。元気で、いい航海をして下さい。手術などにも気をつけて。僕の書いたことなど、気にせず、どんどん、やあやあ書いてくれ。身体だけ大切にせよ。アル中になるな。なれとも云いたい。また。」

〈今朝はねばけていて送りにいかないでごめんなさい。二人ともほんとにフヌケのようになって、まだ宗吉先生のユーレイがどっかにかくれているかもしれないと思って、方々戸を開けたり、ひきだしをあけたりしました。こういう病気にきく薬は、こないだおいてって下すったクスリの中にはないようです。(中略)船は、ドクターの帰りをちゃんと待っていてくれたかしら？ トランクをさげて、ふらふらしながら、『ヤーヤー、待ってくれえ！』とわめきながら、宗吉先生が、さんばしをかけてゆく所を想像しました。(中略)三日間、長いこと待っていただけ、とてもとても楽しく、あつという間に過ぎてしまってがっかりです。(中略)宗吉くんが病気になるとか、ケガをするとか、何かこっちに引っぱっておく口実になる事件がおきないかと思ったのに、せっかく乗り損なった汽車も、次の日にちょうどいいのが、みつかってしまうし…。(中略)うちのダンナさまが、何やらむづかしい批評みたいな小言を書いているようだけど、気にしないで下さい。もともとそういう気質なのですから、意地悪をしているわけではない。〉

北杜夫と辻夫妻がパリで再会した直後の手紙。前半が辻邦生、後半が辻夫人の記述。帰りの汽車に乗り遅れるというアクシデントがあり、辻邦生はこれを『若き日と文学と』<sup>12)</sup>のなかで回想し<sup>注9</sup>、北杜夫も『どくとるマンボウ航海記』<sup>8)</sup>のなかで記述している<sup>注10</sup>。「アル中」という言葉がでてくるが、『どくとるマンボウ航海記』のなかにも「アル中と間違えられた」との記述がある<sup>注11</sup>。

### 1959年3月3日：北（ジェノヴァ）から辻（パリ）宛

「辻夫婦よ。(中略)二人のおかげで、そしてパリの変てこな魔力で、僕は本当に開眼しちまったようだ。もう何が起こっても動じそうにない。まだコーフンしていて、アッパーブリッジの上をのそのそ歩きまわりながら、『自信にみちみちて』などと独り言を云う。こんなことは、今度の旅で期待していなかったことだ。僕の方は、そんな風に、全くすばらしい三日間だったが、二人とも案内やゴチソウ作りで疲れてしまったのではないかな。(中略)二人とも、一種の僕の恩人であることを忘れぬよう！出航したときは、自信にみちみちてコーフンしていて眠られず、ベルギ沖の濃霧の印象と、話してくれた田舎医者との印象とが重なりあって、たちまち一つの短篇を頭の中でこしらへた。こんな風に自信にみちみちてコーフンしていたらそれこそ二十万の短篇をつくってしまいそうで、その代わり三年くらいで死んでしまいそうな気もした。それから、コーフンして、もう名前を忘れたが、サホコ夫人の先生と、オギ？先生にどうか宜しく。(中略)こちらだけ自信にみちてわるいみたいだ。批評どうもありがとう。今あわただしいのでうまく頭には

いってこないが、ところどころ合点する。まあ、僕の感覚と辻先生の頭脳と結びつけば、それこそケッ作ができてしまうので、今からそんなケッ作をかいては末おそろしいから、徐々にやる。精神病院の話<sup>注12</sup>は、かへってから二カ月くらいかけるつもりだが、これはきっとかなりいいところと、とてもわるいところがばらばら混合すると思うので、手ぐすねひいていてくれてよいと思う。(中略) 船には九時半つき、十時出航。これは僕のためにおくらせたのかどうか、そんなことはききもしなかった。その後大イバリでいる。パリでサトリをひらいたから画家になってルーブルにかざられると皆をケムにまいている。ドイツのへんな本をホンヤクしてくれと僕のところにもってくるので、大デタラメに訳してやっているが、役所でたまげるだろう。ユカイである——。お二人も、かくあるべし！」

本論において最も重要と位置付ける手紙。「コーフンして」「自信にみちみちて」「大イバリ」「大デタラメ」「ユカイ」といった表現が散見される内容。(抜粋した文章以外にも、「自信マンマン」という表現が3カ所ある)。「パリでサトリをひらいた」とあるが、『どくとるマンボウ航海記』<sup>8)</sup>のなかには、「サトリ」(もしくは「サトる」「サトって」「サトった」)という言葉が、計23カ所でてくる。この時期の精神状態は、躁状態にあったと考えられ、それが後述する本論考察の主論点のひとつである。

#### 1959年4月12日：北(コロンボ)から辻(パリ)宛

「コロンボ12日着。手紙いつも有難う。(中略) こちらは印度洋に入ってからダメになり、行きにちがい、前途に未知の土地がある訳でなし、日が立つのが長く、一寸神経スイジャク様で、まともな考え一つもうかばず、日本にかえるまで仕事あきらめました。」

一転して欧州よりの帰路(復路)は、意欲減退、思考力減退、食欲低下、易疲労感などを自覚しており<sup>8)</sup>、抑うつ状態にあったと推測される。

### 3-3. 第三章(Ⅲ：1959年5月12日～1961年5月15日)

本章扉の文章。「1959(昭和34)年、帰国した北は、辻の作品発表舞台を求めて尽力を重ねる。翌年、『どくとるマンボウ航海記』がベストセラーとなり、また『夜と霧の隅で』が芥川賞を受賞。多忙となっていく中、疲れを訴える北、パリから励ます辻。二人の間には、文学への純粋な思いと友情が変わることなく溢れている。」

#### 1959年5月12日：北(東京)から辻(パリ)宛

「辻ならびに辻奥さま。ブジ帰りつきました。(中略) 帰ったとたんに兄の子供の半年分のマンガ本を読破し(ムリヨ数十冊)頭完全にヘンになりました<sup>注13</sup>。のんだりのまされたりして疲れが一ぺんに出、便りおしくてすみません。当分ノンビリするつもりだったが、そうも行かずボツボツ書きはじめるつもり。航海記をなんと三軒の本屋から注文されたがみんなコトわった。さよくにバカバカしい日本です。」

航海中に「文藝首都」で連載していた『船上にて』<sup>30)</sup>(1959年1月-5月号)が好評であったため、航海記執筆の依頼を幾つかの出版社から受けるが、小説に専念するために当初は全て断っている<sup>45)</sup>。

**1959年6月19日：北（東京）から辻（パリ）宛**

「御無沙汰してしまってすいません。その後お元気ですか。ついに小生十二指腸カイヨウというのが見つけられ、どうもあまり活躍できそうもありません。帰ってきてから短篇一つ書いただけ。あとサケマスのお話を百枚ほど書いたがヘタバった。まだ精神病院の話、手をつけていません。（中略）いま、体の具合わるくユーウツでパリにいたときが花だったような気がしてます。日本はほんとにゴシャゴシャして、なんたることかとも思います。と云って、いまこの身体で一人パリに住んだら、何年でも口をきかぬし、本物のユーウツ症になるでせうが。みんなお元気で。」

「ユーウツ」「ユーウツ症」（憂鬱、憂鬱症）という表現がでてくる。

**1959年7月19日：北（東京）から辻（パリ）宛**

「やはり具合わるく、少々やせて、どうも消モウしています。タバコは仲々やめられず、それでかへってジタバタしてわるいようです。酒は会にでも出なければのみたいとも思いませんが、今月末もう一度レントゲンをとって、場合によったら一寸入院でもしようかと考へてます。（中略）今、身体がそんなだし、一応書かねばならぬし、そんなことで両方ともうまくいきません。殊にシメキリなんて奴はカイヨウにわるく、なんともシヤクです。ドイツ精神病院のも、まだとりかかれずにいます。（中略）身体に気をつけて。僕は秋になったらきっと元気になる。『谿間にて』は文芸家協会の、〇〇年度集というののことにになりました。それからまた芥川賞コーホになったけど、もうバカらしい。秋はかきたい。」

不調感にて、小説の執筆が滞っていることを辻邦生に報告している。

**1959年10月13日：北（東京）から辻（パリ）宛**

「9月には元気になるつもりだったところ、やはりそんなパツとよくなる病気ではなく、おまけにこの夏の猛烈な暑さにすっかりやられた。なにしろ7・8月とカユばかり食べて油ものも食べられなかったからすっかりやせちゃいました。で、このごろはわざと色々食べていますが、すぐ疲れが出て、精神的にも最低の状態。9月から、もう書かなくちゃいかんと思って小説にもとりかかったが、かってないスランプで、益々、ダメになってしまった。今はあせらないで身体治そうと思ってますが、やはり仕事のこと頭にひっかかっているの、カイヨウには甚だわるい。（中略）パリなんかにいたときはまだ元気で楽しかった。このところ、こんなに老いぼれては、もうおヨメさんでももらってお茶でもわかしてもらいたい心境になって困る。でも、こういうデプレシーフのときは、辻がいてくれるととても助かるのだが。小説も百枚くらいの真中でウゴキとれなくなってるし、あと2-3年もそちらにいるのは、お二人には結局いいことだろうが、僕には一寸さびしい。（中略）僕の作品送りたいが、こんな状態だとどれも見せたくない気持ちが先に立つし、なによりもオックウで困る。」

「デプレシーフ：depressive（ドイツ語）（抑うつ的）」「スランプ」「オックウ」といった記述がある。一方、「パリにいたときは元気で楽しかった」旨を記している。

**1959年10月25日：北（東京）から辻（パリ）宛**

「お手紙ありがとう。（中略）いろいろ御忠告やはげましやなぐさめを頂いて感謝の極ですが、まあ何とか腰をすえてのんびりやるから安心して下さい。ただドイツの小説百二十枚ほど書いて、



ちょうど真中なので、気になって仕方がないが、今までこれを仕上げたら（下手でも）少しは気が晴れるだろうからムリして何が何でも一枚づつでもと思ったり、やはりへばって一先づ中止しようとしたり、今度という今度はとても参ったが、できてもできなくても気にしないでのつもりになった。帰国後航海記をかけと云ってきた本屋がかなりあったが、そのときはそんなもの書きたくなかったのでみんな断ったが、今この状態ではとても小説かけないので、又へんな本屋だけけどそういう話もあるので、ひょっとしたらこの冬はそんなものでも気楽にかくようになるかも知れない。（中略）今のこの状態は精神科でDepressionという状態だけど、これは波があつていづれはよくなる筈だし、カイヨウの方も、ガンにならぬ場所だし、いざとなれば手術さえすれば十年は大丈夫だから、そう案ずることもない筈なのだが、やっぱり一寸参った。辻フサイがそばにいたら三割方よくなると思うが。」

「Depression」の記述あり。かつ「これは波があつていづれはよくなる」ともあり、抑うつ状態の悪化と軽快、もしくは気分の上下変動の波を既に自覚していた可能性がある。奥野健男（文芸評論家）が宮脇俊三（中央公論社編集者）を經由して北杜夫の航海記執筆を勧め、中央公論社<sup>注14</sup>からの『どくとるマンボウ航海記』<sup>8)</sup>の出版へとつながっていく<sup>35,39)</sup>。

#### 1959年11月13日：北（東京）から辻（パリ）宛

「小生の方ですが、11月来、小説をかくことをあきらめてバカげた航海記を書きだしたら、身体具合もかなり回復し、レントゲン検査では十二指腸のカイヨウのかげが殆どとれました。また疲れがちですが、このぶんでは航海記を今年中には書きあげて、来年から小説でも書けると思いません。航海記は本ができたなら送ります。」

#### 1959年12月12日：北（東京）から辻（パリ）宛

「お便りとても有難う。心配をかけたけど、うつ病の方は大体治りました。あと身体の方だけ。これもカイヨウはかなり良くなってる筈なのに、ヤセっぱなしでちっとも太らない。それで一大決心をし、『あなたはタバコをやめられる』という本を買ってきて、キンエンを実行せんとしています。」

1959年4月頃から10月頃までの抑うつ状態が、11月頃から回復し、12月にはほぼ寛解したことが伺える。

#### 1960年2月21日：北（東京）から辻（パリ）宛

「ムッシュウ辻とそのかわいらしき妻君へ。お手紙もらってから返事おくれてすいません。このところヤケに多忙でした。というのは、結局体もよくなっていろいろと行動しはじめたということ。身体についていえば、禁煙というのは、僕にはおそろしく影響した。夜もハラがへってニギリメシを食べる。従って、去年、59キロから52キロまで減った体重が、ここ一カ月半の間にアレヨアレヨというまに、62キロくらいになって、下腹は出てきて、やや動くのも大儀で、これはいよいよ中年太りかと思われるばかり。」

活動性の改善（もしくは過活動状態への移行）と読みとれる内容。体重増加も報告されており、本人はこれを禁煙によるものと解釈している。

#### 1960年5月21日：北（東京）から辻（パリ）宛

「身体は『夜と霧』書きあげたあと、さすがにへばり、又、嘔気して、再度タバコをやめようと思っていたが、そのうちまあまあということになってしまい、へばっていますが、やせません。中年太りかも知れません。冬までには独立して、ヨメなどもらう予定です。まだきめていませんが、僕が予言すると必ずそうになってしまいます。株を覚え、印税で株買ったら、フルシチョフやら何やらのオカゲでボーラクが始まり、見るまにすりました。でも、今、すぐ売ることもないから、もっていれば又あがります。それでないと独立できない。」

39歳（1966年）以降の躁病エピソード時には、ほぼ毎回、株の売買の逸話がともなうが、33歳時（1960年）にも既に、株売買とそれにとともなう損害を経験している。

#### 1960年6月8日：北（東京）から辻（パリ）宛

「パリのお二人へ。手紙とても有難う。感謝しています。（中略）株が五月にボーラクして『マンボウ』の印税ずいぶんすってしまった。みんな喜んでいます。（中略）十二指腸カイヤウの方はビールだけならまずまず。」

株による損失に関する北杜夫の報告。

#### 1960年7月21日：北（東京）から辻（パリ）宛

「15日に沖縄から戻ってきました。（中略）クタクタで、むこうも暑かったが、東京もあつく、完全にへたばったら、『夜と霧』が芥川賞になってしまった。（19日）それでコテンパンにシンケイスイ弱になった。辻のいるところと違って、一年ごとにお祭りさわぎになっているので、ラジオテレビのがひどく、あちこち逃げ歩いていて、ヒルネもできません。ここ三月ほどねたいと思っていたが、ゾッとします。でも、なんとかうまくやるからまあ御安心を。」

沖縄旅行後の疲労と、芥川賞後の喧騒で、神経衰弱（疲弊状態）との北杜夫からの報告。

#### 1960年8月12日：北（東京）から辻（パリ）宛

「その後、やはり一寸ひどい目に会っています。ある程度どんなものか知っていた筈ですが、いざとなると、予想以外にひどい。みすみすつまらないことだと思いながら、弱気をだしてしまうのです。（中略）僕のほうは、仕方ないからここ三カ月ほど大衆小説のようなものかいてゴマかします。それより一寸うれしいことは、東映の長篇マンガのシナリオの話『船のりシンドバッド』があり、これは東映がかなり力をそそいでいるマンガの第三作で、（二作はいまフウギリの手塚治虫の西遊記）案外ぼくに打ってつけの仕事かと思えます<sup>注15</sup>。ただ、こういうのはできるまでに二年かかるそうで、その代わり、外貨くらいかせいでしまうとのこと。案外、僕の小説はみなほろびてマンガばかり残ることになるかも知れない。」

長篇漫画映画『シンドバッドの冒険』（1962年公開）に、北杜夫は手塚治虫とともに脚本で参加している。東映動画は、ディズニーを意識して、輸出を前提とした長篇漫画映画を製作しようとしたという経緯がある<sup>42)</sup>。よって「外貨をかせぐ」という発想はあってもよいのだが、北杜夫は躁期になると、「外貨をかせぐ」という理由で、作家以外の職業になりたがるという特徴があった<sup>注16</sup>。あるいは「映画をつくりたい。映画をつくるためには相当の資金が要るから、今日から株の売買をします」といった躁状態での発言もある<sup>26)</sup>。

#### 1960年10月14日：北（東京）から辻（パリ）宛

「このところ、なんだかだと雑用で、一字も小説がかけない。以前だったら苦にもならぬことだけど、ここしばらく正直の話、せつかれるような気分をどうしても感ずる。ほかの筆一本でやろうとはじめから思っている人にくらべると、僕はずっとノンキなのだが、それでもこうした神経の疲れを覚える。(中略)昔はやはりよかったとしみじみ思った。孤独と無名というものがやはり一番貴重なのだと思った。(中略)でも、その週刊誌になんぞかくというのは金にはなるけどメチャメチャにもなるらしく、両方を使いわけてやってゆくのは手品みたいなものらしい。(中略)僕の本は売れるといってもここ半年のもので、あとはまた問題作でもかかないかぎり、とても本のインゼイなどあてにできないことは確からしい。だから小説家なんて水商売だから、ぜひ一定シウニュウの道は確保したほうがいい。僕は医者より株をやるつもりで、この春から夏にかけて大分すったけど、これから先はモウけるつもり。」

「飲酒」「株」に関する記述があるとともに、「せつかれるような気分」「神経の疲れを覚える」と述べ、疲労感や焦燥感を推測させられる内容。一方「株」に関しては、「これから先は儲けるつもり」とあくまでも前向きである。

#### 4. 考察

##### 4-1. 双極性障害の診断閾値

39歳の顕在発症より前の気分変動を検討することが本論の主眼であるが、その前段階として、双極性障害の発症時期を同定することの限界と問題点について言及しておく。双極性障害は、単極性うつ病よりも、診断に時間がかかるとされている。それは双極性障害が、当初は抑うつ状態で発症し、しばらくは「うつ病」の診断での病歴があり、その後初回の躁病エピソードが出現してはじめて、「躁うつ病（双極性障害）」の診断がなされることが多いからである<sup>49)</sup>。双極性障害の37%が単極性うつ病と誤診されているとの指摘や<sup>5)</sup>、双極性障害患者の1/3は正しい診断・治療がなされるまでに発病から10年以上が経過しているという報告もある<sup>7)</sup>。

ただしこれは、双極性障害の診断と治療を重視する立場からの指摘である。逆に、双極性障害の過剰診断に対する批判的立場からは、明らかな躁状態が出現していない時点で早計に双極性障害と診断することの問題や、あるいは双極性障害と診断しないことが「誤診」とみなされることに対する疑義などが存在するだろう。軽躁状態を気分変動とみなす「双極Ⅱ型障害」や、不機嫌な情緒や易刺激性なども「双極スペクトラム」と診断する立場<sup>1)</sup>、さらには病前性格として発揚気質も診断要素とする提言などから、近年、双極性障害の概念は拡大傾向にあるが、同時に、それを双極性障害の過剰診断として批判する立場も存在している<sup>6)</sup>。バイオマーカーをもたず、症状から診断を導き出さざるをえない精神科診断においては、たえずこの過剰診断と過少診断との意見対立が存在し、特定の疾病概念の拡大と縮小が繰り返されてきた歴史がある<sup>36, 41, 49, 53, 54)</sup>。

よって北杜夫の場合も、気分変動の閾値をどの程度に設定するかによって、発症時期はいかようにも評価できる。北杜夫が「躁うつ病」と自己診断した1966年（39歳）の日本精神医学は、「躁うつ病」の診断におけるハードルは高く、日常生活に破綻を呈するほどの気分変動の存在が確定診断には必要とされていたと考える。また診療にあたった精神科医（同門のなだいなだ等）

や、精神科医である兄（斎藤茂太）や甥（斎藤章二）による診断も「躁うつ病」で一貫しており、診断閾値を高く設定し、厳格な診断基準を当てはめてもなお、北杜夫の診断は、典型的な「躁うつ病（双極性障害）」であったと考えられる<sup>55)</sup>。仮に診断閾値を低めに設定し、39歳時の自己診断より前の気分変動にまで遡ることで、より若年時に発症起点があったのではないかとする考察も可能ではある。ただし本論においては、現代精神医学の観点は踏まえつつも、過剰診断の問題は回避する立場をとり、あくまでも双極性障害の確定診断は39歳（1966年）の顕在発症時とし、それより前に存在した可能性のある気分変動に関しては「顕在発症前エピソード」とみなすことにする。

#### 4-2. 顕在発症前における気分変動の存在

北杜夫の躁病期の代名詞ともいえる「株の売買」が、33歳時（1960年）には既に開始されていることは重要である。少なくとも、39歳（1966年）の躁病発症時に、突如として株に手をだしたわけではない。これと同様に、ギャンブルも北の躁病期にはよくでてくる逸話であり<sup>注17</sup>、顕在発症後のエピソード（41歳1968年：米国ラスベガス、72歳1999年：韓国カジノ）がある一方で、それ以前にも、東北大学時代<sup>25)</sup>や慶應義塾大学病院時代から競馬をやっており<sup>注18</sup>、また35歳（1962年）と37歳時（1964年）には医局時代の先輩・相場均<sup>注19</sup>とマカオのカジノに乗り込み、同様に「賭博で一文無し」となる経験を有している<sup>45)</sup>。

北杜夫の辻邦生への手紙のなかに、「イウツ（憂鬱）」の表現がでてくるのは1949年（22歳）であるが、これは一般用語である憂鬱感として理解することもできる。一方、北杜夫が精神科医となって以降の1959年6月に記載のある「ユーウツ」「ユーウツ症」（憂鬱、憂鬱症）や1959年10月の「デプレシーフ」「Depression」の記述は、精神科医の視点から精神医学用語として使用されていると考えるべきであろう。内因性の病態かどうかはさておき、少なくとも1959年（32歳時）に「抑うつ状態」の時期はあったと推定される。

躁状態の有無が論点となるが、ひとつには、1959年2-3月の「パリでサトリをひらいた」という逸話がそれに該当するのではないかと考える。1959年-1960年（32-33歳）の主な出来事と推定される精神状態を表にした（次頁：表1）。北杜夫と辻邦生の往復書簡からは、帰国後の1959年4月頃から10月頃までは抑うつ状態と推察され、それが11月頃から回復したことが伺える。1960年の書簡からも、食欲増進（2月）、株売買（5月-6月）、神経衰弱・疲弊状態（7月）、飲酒や株の報告、疲労感や焦燥感の弁（10月）などが読み取れ、混合状態もしくは急速交代期にあったのではないかと考える。

北杜夫を一躍ベストセラー作家にした『どくとるマンボウ航海記』は、躁状態（パリのサトリ）とうつ状態（帰路、帰国後）を経た後の精神状態が、創作の源泉として大きな役割を果たしたのではないかと考える。

表 1. 1959年-60年の主な出来事と推定される精神状態

		主な出来事	書簡の記載内容等	精神状態
1959年	1月	アフリカ沖の北回帰線上で元旦を迎える		
	2月	パリで辻と再会	「パリでサトリをひらく」	躁状態
	3月		「自信にみちみちてコーフンしていて眠られず」	躁状態
	4月	照洋丸での航海より帰国	意欲・思考力減退、易疲労感、易怒性（憤怒）	混合状態
	5月		「疲れが一ぺんに出」	うつ状態
	6月		十二指腸潰瘍と診断。「ユーウツ」	うつ状態
	7月	『夜と霧の隅で』執筆停滞	「具合悪く、少々やせて、どうも消モウしていません」	うつ状態
	8月		食欲低下、体重減少	うつ状態
	9月		「かってないスランプで、益々、ダメになってしまった」	うつ状態
	10月	10月末『どくとるマンボウ航海記』執筆開始	「デブレシーフ」「スランプ」「オックウ」	うつ状態
	11月		「身体具合もかなり回復」「まだ疲れがち」 最速執筆? (月産200枚?)	
	12月	12月9日『どくとるマンボウ航海記』脱稿	「ウツ病のほうは大体治りました」	
1960年	1月		体重増加	
	2月		「体も本当によくなっているいろいろと行動しはじめた」	軽躁状態
	3月	『どくとるマンボウ航海記』出版		
	4月		「実はこの1カ月、死力を尽くして人力のハテまで仕事しました」	軽躁状態
	5月	『夜と霧の隅で』（新潮に発表）	「株が五月にボーラクして『マンボウ』の印税がいぶんすってしまった」	軽躁状態
	6月	『夜と霧の隅で』刊行。沖縄旅行	「今日は、昔からある昆虫専門店へ行って、いい網やら何やら沢山買いこんだ」	軽躁状態
	7月	『夜と霧の隅で』芥川賞受賞	「コテンパンにシンケイスイ弱になった」	
	8月	『シンドバッドの冒険』に脚本で参加	「弱気をだしてしまうのです」	
	9月	『幽霊』刊行。横山喜美子と婚約		

1960年	10月	『羽蟻のいる丘』刊行。 医学博士授与	「一字も小説がかけない」「せつかれるような気分」「神経の疲れを覚える」	うつ状態
	11月		「僕はここ当分、マトモなものにはとりかからない」	うつ状態
	12月		「家を探したり、カゼひいたり、ゴタゴタしていて新年になってしまいました」	

#### 4-3. 『どくどくマンボウ航海記』における気分変動と創作

双極性障害（躁うつ病）の病状変動を理解するための模式図を示した（次頁：図1）。基準線（横軸の中心線）より上方が躁病相（Manic phase）、下方がうつ病相（Depressive phase）をあらわしており、時間軸は左から右に移動する。この場合、時間軸の基準線は「a」であり、この線を境に「躁病相」と「うつ病相」が区分けされる（A）。一方、基準線「b」は、「躁病相の極期」と「うつ病相の極期」の時間軸を表しており、これによって「下降期」（Down）と「上昇期」（Up）が区分けされる（B）。よって細かく分けていくと、「躁病相の前期：①」「躁病相の後期：②」「うつ病相の前期：③」「うつ病相の後期：④」とみなすことができる。あるいは「躁病相の上昇期：①」「躁病相の下降期：②」「うつ病相の下降期：③」「うつ病相の上昇期：④」と呼んでもよい。ただしここでは、北杜夫における双極性障害の病状変動と創作との関連性を考察するために、便宜上、「上昇前期：④」「上昇後期：①」「下降前期：②」「下降後期：③」と名付けることにする。

本図についての注意点を以下に記す。

先に言及した通り、本論では北杜夫の双極性障害の確定診断は39歳時とするため、それより前の気分変動に本図を適応する場合は、「躁病相」「うつ病相」とするよりも、「躁状態」「うつ状態」と表現するほうが適切である。用語定義の問題であり、厳密にわけると意義は薄いかもしれないが、以下の考察では、「躁状態」「うつ状態」を用いることにする。

またこれはあくまでも模式図であり、実際の複雑な病状変動を、このように単純化された概念図ですべて理解することはできないことを強調しておく。双極性障害（躁うつ病）の病状変動をあらわす際に、このような模式図はよく使用されてきたが、大前は、これが「患者の体重を経時的に測定したグラフ」や「（電気技術の）三相交流波」の図から影響を受けてクレペリン（Kraepelin）が作図したであろう歴史的経緯を指摘したうえで、このような図が理論的裏づけなく使用されてきたことを、以下のように注意喚起している<sup>41)</sup>。

「あくまで『もののたとえ』『約束事』『決まり事』にほかならず、脳内で血流や化学伝達物質や電氣的刺激が増えたり減ったりしているという意味では決してない」「躁うつ経過とも三相交流波ともつかないシェーマが、あたかも実体的裏づけをもっているかのような錯覚に、Kraepelin自身がおぼれてしまっているかにみえる。」「われわれが双極性障害についてもっている忘れがちな先入見は、このような双極性の実在性を暗黙のうちに認めていることにある。Kraepelin自身にそのような意図はなかつただろうが、双極性障害とは、このシェーマと

Wernicke学派の思想、すなわち要素還元主義的局在論や機械的反射論などのイデオロギーが後年に結びついた結果である。」「Kraepelinによる正弦波は、1957年Kraepelinによって生理学的仮説を与えられたうえで復活した。(中略) こうして正弦波は徐々に、生理学的な裏づけをもつかのよ  
うな錯覚を与えるようになっていった。」<sup>41)</sup>

本図は、意欲の増減、活動性や気分の上下変動を、視覚的な「上昇」「下降」に変換するとともに、病相期を概念化するための単なる模式図である。ただし、前述したように、北杜夫の診断は、躁病相とうつ病相を繰り返す典型的な躁うつ病であり<sup>55)</sup>、その病状経過を直感的に理解するには、このような概念図の有用性は高いものとする。

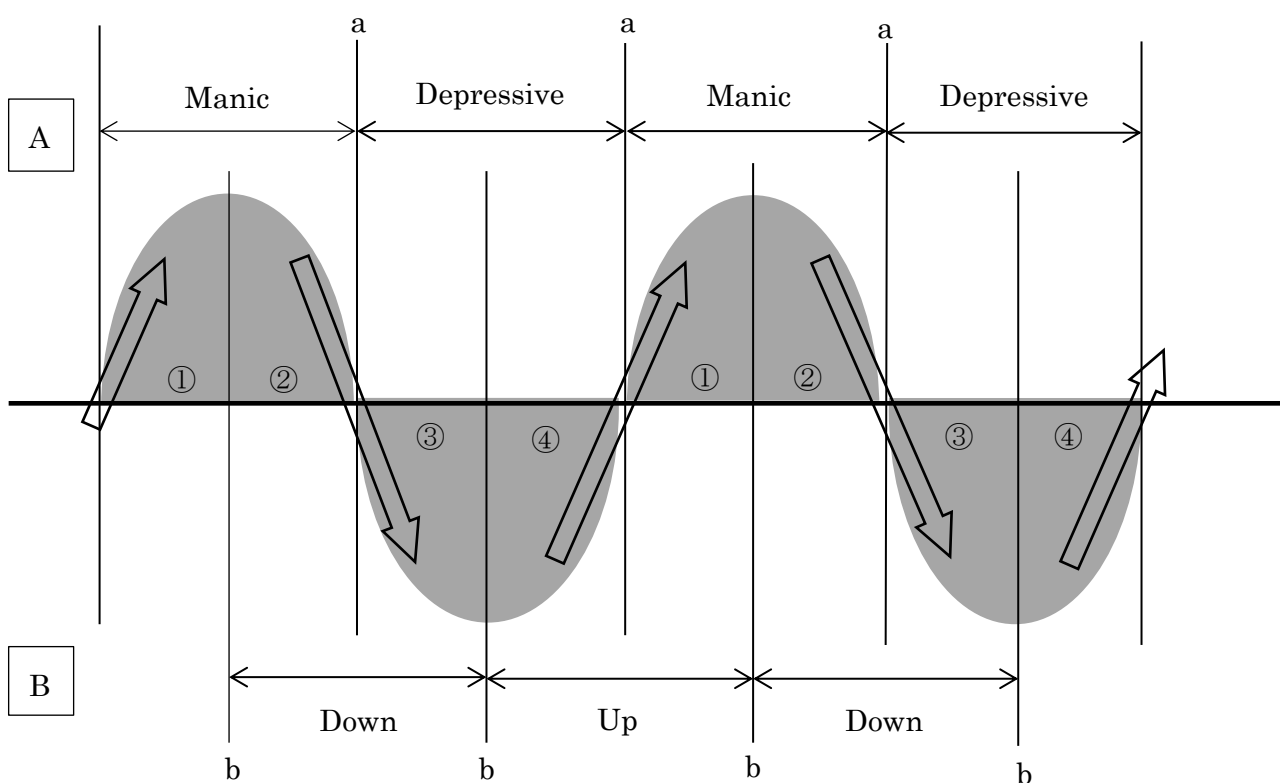


図1. 「躁病相」「うつ病相」と「上昇期」「下降期」

#### 4-3-①「上昇後期」(躁状態の前期)

躁状態の極期に至るプロセスであり、『どくとるマンボウ航海記』においては、パリへと向かう往路にあたる。本書前半部では、船上や港々における数々の逸話が記されており、日本を出航した時から活動性は高かったと考えるが、さらにパリ訪問を契機として、躁状態の極期を呈したものと考えられる。パリを出立した直後の手紙には、「出航したときは、自信にみちみちてコーフンしていて眠られず、ベルギ沖の濃霧の印象と、話してくれた田舎医者との印象とが重なりあって、たちまち一つの短篇を頭の中でこしらへた。こんな風に自信にみちみちてコーフンしていた

らそれこそ二十万の短篇をつくってしまいそうで、その代わり三年くらいで死んでしまいそうな気もした。」と記している。観念奔逸により思考の奔流と高揚気分が、「サトリをひらいた」という感覚につながったのではないかと想像する<sup>注20</sup>。これに関しては『どくとのマンボウ航海記』<sup>8)</sup>のなかに詳述されている。まず前置きとして、「とにかくにも私はパリが気に入ったばかりか、困ったことにサトリなどひらく始末になったのであるが、この間の事情はそのころ私が船の中で書いた便りを読んでもらったほうがいい。これはある同人雑誌に連載するため港々から送っていた便りの末尾だが、なにしろサトリを開いて日もたたぬころのものゆえ、文章にもどうしてあやしき迫力があるのである。」とあり、以下にその文章が続く。

「私のわるい癖で、パリなんてどうせ大したものであるまいと思っていたところ、どうしてこれがおどろいた都で、実に不可思議なる都で、私は得るところがあったどころか、ほとんどサトリを開いてしまった。パリの象徴は、ヴァレット街の角にある実に汚い床屋である。(中略)これとサトリとをどう結びつけるかというならば、大体がサトリなどというものは各自で勝手にサトって、人に語るべきことではない。サトるとどうなるかという、まずパンツの紐が少しゆるいことに皆は気づくであろう。これは腹部の筋肉が収縮するためである。なぜかといえばこれはなかなか難しい問題で、(中略)とても理解しがたいであろう。私にも少しもわからぬ。さて、次にどうなるかという、大抵の人はパンを1個食べる。腹がへるからである。次に、『タイガースはなぜ田宮を手離した?』などと怒り出すのもよく見られる現象だが、実はそんなことはてんで意に介していないのである。(中略)しかしこれは私がまだサトる前のことであって、サトるとこんな余計なことは一切なくなる。サトると網膜に映る現象なんぞに影響されなくなるから、従って目をあいていてもムダである。従って目をつぶって街路を歩くことになり、大抵は自動車にはねとばされて死んでしまう。従ってときにサトってないふりをすることも必要であるが、そんなことは腹立たしいことにちがいない。そこで彼はわめくことになる。『タイガースはなんで田宮を手離した?』サトると怒ったりしないというのは、あれはてんで嘘なのである。もうどんどんとばしてしまう。次の港はジェノヴァで、私はミラノに3日滞在し、ゴマンとある芸術作品を見た。人は私が少しはそれについて書くと思うだろうが、どうしてそんなことはしないのである。(中略)いつかは少しマシなことを書くだろうと思って読んでくれた人があったとしたら、それは大変お気の毒である。しかしサトるとそんなことにかまっていられない。今私は大変に憤っているのである。『なんでタイガースは田宮を手離したんだ?』<sup>8)</sup>

「ある同人雑誌に連載するため港々から送っていた便り」とは、文藝首都の1959年1月号から5月号に連載されていた『船上にて』<sup>30)</sup>を指す。この「パリのサトリ」の文章は、最終5月号の末尾の文章であるが、本人も「あやしき迫力がある」と表現しているように、この箇所だけが突出して異彩を放っている。『どくとのマンボウ航海記』は、この『船上にて』と旅行中の日記・手帳を基にして帰国後に創作されているが、『船上にて』は、旅行中にリアルタイムで書かれたものを日本に送ったものであるため、当時の精神状態がそのまま文章に反映されていると考えてよい。筆者らはこの文章が、観念奔逸の思考状態で書かれたものとするが、『どくとのマンボウ航海記』自体が、全体に観念奔逸的な文章(話があちこちに飛ぶ)であるため、この文章が挿入



されても、全体としてそれほど違和感がない。しかし『船上にて』は、ユーモアを含んだ文章も多いものの、抒情性のある文章の割合も高く、この「パリのサトリ」の文章は唐突感がある。またそれと同時に、形容し難い独特のユーモア感覚が創造された文章ともなっている。躁状態は、後年、株の売買などの問題行動やマンボウ・マブゼ共和国の独立宣言といった逸話にも発展していくが、それらを含め、北杜夫の創造性には欠くべからざる要素であったと考えられる。

#### 4-3-②「下降前期」(躁状態の後期)

躁状態ではあるが、意欲と気分は減弱していく。欧州よりの帰路は、易怒性を残しながらも意欲減退が目立つようになり、混合状態へと移行したものとする。

「私はなにぶんサトってしまったものだから、フランスを離れて以来、果然ナマケモノとなった。私は寝坊するようになり、朝食にはめったに起きず、ひどいときには昼食になって辛うじて寝棚を離れた。(中略)ともあれ、私はなにぶんサトってしまったものだから、あらゆることが怠惰になり、目も両方あけているのはムダなので片一方だけ開けていた。チーフ・オフィサーがドイツの漁業調査船アントン・ドルン号の説明書を持ってきて訳してくれという。私は、何を隠そう自分はサトリをひらいたから、さようなくだらぬことは今後一切しないと断った。(中略)さらに私はフヌの鬼と化した。言語道断にもタイガースが田宮を手離れたからである。(中略)田宮に脱けられてしまっただけでは、優勝なんてネス湖の巨竜を捕らえることより難しい。かくて私はフヌの鬼と化したのであるが、サトるとどうもヤタラメツポウ怒りたくなるものらしい。(中略)私がこんなふうにならぬに横たわり、かつメラメラと憤怒の炎など燃やしているうち、海は次第に青く、太陽も日まじにその輝きをましてきた。もう地中海なのである」<sup>8)</sup>

混合状態は、1969年にみられた躁病エピソードの末期にもみられている<sup>55)</sup>。「このときは前よりもケンカし、怒りっぽくなったため、病勢がはげしく、友人の心理学者、心配して忠告にくる。慶応時代の同僚の医師に薬もらい使用。体力おとろえてフラフラとなる。なだいなだ、今度くるうつ病は大きいぞと予言。3名の友人の医師が警戒体制をしく。11月末、与えられた性格改善薬(なだいなだの皮肉の言)により、ヘラヘラ笑い、異常。突然に笑いだしたり、泣き出したりする。体重減じ、自分でも反省のいろ濃く、すぐ間近の次期うつ病の予感を覚えて不安だった」<sup>34)</sup>

#### 4-3-③「下降後期」(うつ状態の前期)

混合状態である「下降前期」の延長線ではあるが、意欲と気分のポテンシャルは、通常以下にまで低下し、「うつ状態」へと移行する。

「暦は4月となり、日本を出てからすでに4カ月半が経過しているわけである。そのころから、さすがに肉体の疲労、気分のいらだちを私は感じはじめた。やはり軽い神経衰弱を呈しているのであらう。」「インド洋に出たならば少しは書きものでもしようかと前々から私は考えていたが、さてノートなどひろげると頭は実に空虚である。身体はけだるく、食欲はさっぱりなく、やはり疲労が積み重なっているようだ。(中略)頭は半ば麻痺して日ごとに鈍磨していくようだ。」<sup>8)</sup>

意欲減退、思考制止はさらに進み、易怒性も減弱し、しかし焦燥感(苛々)が残存する。「こ

れでもう寄る港もないとなると、さすがに私は氣力がなくなった。ますますナマケモノとなり、探偵小説はもう難しくて読めず、ハダカの女の子の写真も単にサクバクたる眺めにすぎない。(中略) 生来ズボラのうえに長い航海の影響かますます弛緩してしまった私は、一つの薬品について診療簿をくって数えてゆくのだが、途中でいつの間にか数がわからなくなってしまう。パリのサトリもどうやらインチキのものであったらしく、腹を立てる氣力も起こらない。ただイライラだけはする。これははいよいよ本物の神経スイジャクらしいぞ、と私は思い、(中略) すぐに遠い昔の船乗りたちのことを思ってアワてて自分を叱った。」<sup>8)</sup>

帰国後も抑うつ状態は続く。北杜夫の手紙でも、「いま、体の具合わるくユーウツでパリにいたときが花だったような気がしてます」(6月19日)「精神的にも最低の状態」「かってないスランプ」「デプレシーフ」「オックウで困る」(10月13日)「今のこの状態は精神科でDepressionという状態」(10月25日)とある。

#### 4-3-④「上昇前期」(うつ状態の後期)

11月の手紙からは、一転して上昇傾向の内容に変化する。「11月来、小説をかくことをあきらめてバカげた航海記を書きだしたら、身体具合もかなり回復し、レントゲン検査では十二指腸のカイヨウのかげが殆どとれました」(11月13日)「ウツ病の方は大体治りました」(12月12日)。

そしてこの時期が、ちょうど『どくとのマンボウ航海記』の執筆時期(10月末から12月9日)に重なっている。「10月末、ついに私は『夜と霧の隅で』を中途であきらめ、思い切ってバカげたものでも書いたらストレスにもよかろうと、『船上にて』を元にして、『航海記』の書き下ろしにはいった。幸いくわしい日記はあるし、私としてはかなり早い速度で仕事ははかどり、12月9日には稿を終えた。」<sup>28)</sup> 『どくとのマンボウ航海記』の執筆速度は、約1.5ヵ月で300枚であり<sup>注</sup><sup>21)</sup>、いくら資料があるとはいえ、自ら最速と述べた月産200枚(『船乗りクプクプの冒険』<sup>9)</sup>)と並ぶ速度である<sup>28)</sup>。小説『夜と霧の隅で』の執筆を中断し、『航海記』の執筆をはじめたことが、抑うつ状態を改善させる契機となった可能性はあるが、一方で、『航海記』を執筆し、原稿を完成させる作業が、この「うつ状態の後期」であったことは注目すべきである。船医を体験した時期は躁状態であったと考えられるが、その体験を振り返り、創作物として完成させるには、客観視できるだけの冷静な心理状態にある「うつ状態」の時期のほうがふさわしく、かつ意欲が減弱する「うつ病相の前期」ではなく、ベクトルが上昇に転じる「うつ状態の後期」がもっとも良いタイミングであったのではないかと考える。ちなみにこの『航海記』の執筆に続ける形で、中断していた小説『夜と霧の隅で』を完成させており、活動性の上昇傾向を小説執筆にまでつなげたとみることができる。

沈黙考するための落ち着いた精神状態と、執筆に必要な発動性上昇傾向の両者を兼ね備えた「うつ状態の後期」が、創作活動に適した時期であった可能性がある。その一方で、創作の基となるアイデアや体験は、躁状態の観念奔逸や過活動状態によって得られたようにもみえる。例えば1966年(39歳)には、躁状態の勢いで10月からユーモア小説『奇病連盟』を新聞連載で開始しているが、11月にはうつ状態となり、いやいや書きつづけ、「自称失敗作」との評価を下してい

る<sup>28,34</sup>。あるいは1968年6-7月は躁状態を呈しており、この時期に『さびしい王様』の執筆を開始しているが、長期連載中にうつ状態に転じている。「『さびしい王様』はこの期の躁病の名残りのあった7月に書き出され、連載1回目で早くもダウン、3回目からはうつとスランプ状態の中でなかなか筆が進まず昭和44年の春までかかることとなった。」<sup>34)</sup>

例外はあるのだが、あえて単純化すれば、「躁状態」は創作の発端となる発想や体験を為す時期であり、そこでのアイデアや経験を踏まえ、その後の「うつ状態」に作品の制作を継続させ、最終的に創作活動のサイクルを完結させているようにみえる。「風呂敷を広げる」時期と「広げた風呂敷をたたむ」時期と例えてもよい。ただし、「風呂敷をたたむ」というプロセスにも一定のエネルギーは必要である。気分変動の波に翻弄されながらも、北杜夫の創作活動は持続的であり、商業デビューした33歳（1960年）から逝去する84歳（2011年）までの52年間で、新書を出版していないのは2年のみ（79歳：2006年と81歳：2008年）である<sup>55)</sup>。北杜夫は、執筆の原稿枚数について、「鬱のときは月産7枚などという情けない状態になる」<sup>23)</sup>と述べているが、これは、うつ状態でも創作活動が完全に停止することはなかったことを示している。この持続力も北杜夫の創作者としての特徴といえるだろう。

米国精神科医のアンドリアセン (Andreasen) は、30人の作家を対象とした研究で、有意に気分障害の病歴が多くみられたと報告し<sup>2,3)</sup>、「かなり多数が、あきらかに気分障害の時期を経験していた。ただ、その期間は創造にとっては障害だが、恒久的でなく永続するものでもない。場合によっては、ワーズワースふうになると『静寂のうちに回想される感情』のように、後になって創作のもとになるような強力な材料を得ることもあった。」「どの作家も、鬱状態や躁状態ではどちらも創造性が発揮できないと話した。」<sup>4)</sup>と著している。これは躁状態下での経験やアイデアを、うつ状態を経た後の安定期に創作物として完成させたとする前述の考察にも通ずる指摘といえるだろう。また喜美子夫人は、北との生活を振り返り、「主人の場合、躁期になるととにかく感情の振幅が大きくて、まったく別の人格になってしまいます。つまり正常な北杜夫、躁病の北杜夫、うつ病の北杜夫になってしまいます。」「主人と生活するということは、3人の人格と付き合うようなものでした。昔どおりの優しくて穏やかな主人、それから躁の主人、鬱の主人と。躁状態でも、困ってしまう部分と、かわいい、おもしろい部分があって。ですから結局、主人を憎めないのです。」と述べている<sup>43,44)</sup>。また北杜夫自身も「私の躁病は、それまでの体験だとせいぜい三カ月しか続かぬ。あと少しノーマルな時期を経て、それからもっと長い鬱病へと落ちいってしまう。これはいかに薬を使ったとて、人為的にはどうにもならぬ自然の流れである。」と著している<sup>17)</sup>。本論では「躁状態」と「うつ状態」を強調して考察してきたが、実際にはそのどちらでもなく、また「混合状態」でもない「ノーマルな時期」があり、そこが最も創作には適していた可能性がある。

#### 4-4. 『どくとるマンボウ航海記』の新規性と北杜夫の才能

観念奔逸（躁状態）を経て、さらには抑うつ状態を経たうえで創作されたと考えられる『どくとるマンボウ航海記』は、それまでの旅行記・随筆にはないユーモアと自由奔放な文体に満ちて

おり、他に類する作品を想起できぬほどの新規性を放っている。

辻邦生は、『航海記』を読後の1960年5月30日の手紙で、「宗吉は近来稀な詩人なのだ。(中略)決して株の見通し以上に政治を論じたり、経済を見通したり、文学ゲイジツを談じたりしてはいけない。(中略)それが創造の源泉であり、秘密であることを思いかえして下さい。宗吉のマンボウの秘密の操作はそこにあり、あれは僕をひどくうならせた。(中略)今の宗吉の資質、歩み、内容は、『世界的規模において』稀なほどすぐれている」「今、宗吉のいる位置は、文学史的に、きわめて重要です。」と北杜夫に説いている。

近代日本文学史は、その時代の思想・芸術運動と深く連動し、「自然主義」「反自然主義」「プロレタリア文学」「芸術派」といった一連の流れが存在する<sup>38)</sup>。また北杜夫が創作をはじめた終戦後には、「戦後派」「無頼派」「第三の新人」などに括られる作家が活躍した。しかし、それら主義主張や創作スタイルとはまったく異なる位置から、完全な独自性と新規性をもって北杜夫は文壇に登場している。辻邦生は、その重要性を誰よりも早く察知したといえる。『航海記』の出版に一役買った文芸評論家の奥野健男は、本書を以下のように評価した。「日本人の対西欧劣等感とその逆投影であるかたくなな日本国粹主義との両方に無縁な、後進国コンプレックスのない、自由で自立的なそして気張らない最初の旅行記である。(中略)その意味で、本書は一見ふざけているようで、日本文学史に画期的な役割を果たした本である。」<sup>39)</sup>

前述したように、『航海記』は気分変動の基で創作されたと推測するが、しかし内容的な破綻は一切みられず、その構成はみごとである。例えば第6章「タカリ、愛国者たむろすスエズ」は、「ナショナリズム」がひとつのテーマとなっているが、それを軽妙なテンポとユーモアで展開させる。検疫官などから薬を要求された北杜夫が、「日本医学の真価をみせてやるのはこのときだ」とばかりに薬を与えはじめるが、その要求は際限がなく、ついに北杜夫は「この船はそんなものは持たぬぞよ！」と怒り出す。そして「こうした植民地的貧困の残渣は、現在この国に澎湃とみなぎっているナショナリズムの息吹きと一見奇妙なふうに入り混じっている」とつなげる。現地の素足の子供たちとの交流などを描き、さらに生物学的人間論のなかで、「私は、ホモ・サピエンスはホモ・プレクルゾリウスとも混血可能なのではあるまいかという仮説まで有するが、これは重大な秘密に属し、うっかりこんなところを書いてしまつては大変である」と雑学を披露し、「白鳥座連星系61の惑星人」の話を駄洒落で落とした後、「どうもあまりにも話がそれて自分でも收拾がつかなくなったが、まかり間違つても、私が人類愛を説いているのだなどは夢にも思わないで頂きたい」とまとめる。

あるいは第7章「ドクトル、閑中忙あり」は、「死」をテーマにしているし、第9章「ポルトガルの古い港で」は、悪魔やキリスト教、マリア信仰などの「宗教」をテーマのひとつとして、それを売春婦とのやりとりを下敷きに展開させていく。「死」や「宗教」「ナショナリズム」といった普遍的なテーマを扱っているにも関わらず、珍道中の逸話や雑学のなかに織り交ぜることで、読む側にそれをほとんど悟らせない。奇想天外にみえて、実は緻密な構成となっているが、おそらく計算して意図的に創作されたものではない。感覚的な勢いで作られており、これが誰にも真似のできない北杜夫の卓越した才能(感性)である。「パリのサトリ」の時期にみられた躁状態

は、それを持続的な創作につなげることが難しいが、その後の「うつ状態・後期」における気分・活動性の上昇傾向を原動力として、本作品を完成させたのではないかと考える。

気分変動の波は、これまで最初の躁状態といわれてきたエピソード（1966年：39歳）よりも前に存在していたと考えられる。北杜夫はこの一連の時期を振り返って以下のように語っている。「かつて『どくとるマンボウ航海記』を書いた頃、私は未だ元気であった。さまざまな暴言を吐くため、人からはヒンシュクされていたが、暴言が取得のような男であった。その後、私は急速に老いこみ、人間嫌いとなり、なにより口をきくのも億劫になった。（中略）私はそれを自分が完全に老いこんだせいだと思っていた。『マンボウ』の名は返上しようと思い、『マンボウ臨終記』という本のことを出版社と相談までした。ところが数年を経、この4月、私はだしぬけに元気になった。人には大なり小なり循環気質というものがある。高揚期と沈滞期がある。その甚しいものが躁鬱病である。人によっていろんな周期がある。」<sup>17)</sup>

#### 4-5. 航海士からみた「どくとるマンボウ」

照洋丸の航海で、北杜夫は三等航海士と相部屋であった。『航海記』で北杜夫は、「同室の三等航海士は、ときにフカのごとき不気味な目つきで人を睨む悪癖を有するほか、極めて気持ちのいい男であった」<sup>8)</sup>と書いている。この航海士である眞後智一氏は、後に航海中の思い出を寄稿しており、当時の北杜夫を知る貴重な資料となっている<sup>50)</sup>。以下は、その眞後氏による記述。

「私が当直を終わって、船室に帰って見ると、彼はソファーにかけ、紅茶にたっぷりウイスキーを入れ、小梅の漬け物をつまみながら、一口一口嚙みしめる様に、茶を飲んでおり、口の中でぶつぶつ何かをつぶやいていたことを思い出す。彼は何か飲んだり食べたりする時、一々その味について『ウンこれはうまい』とか『ウン！いい味だ』などと確認してから喉を通す性癖があった。（中略）まったく初めて船に乗ったという先生が、ウイスキーたっぷり入った紅茶を平然と飲んでいるのには、いささか驚かされたというより、ちと我々の神経とは違うなという感じの方が大きかった。先生は自分でも書いている通りまったく船酔いを知らぬ幸福な人種であった。」  
 「なぜ睨んだかについて、一度釈明しておくが、（中略）何しろ天真爛漫な先生のことゆえ、公開の席上で突然、突飛な言動をされた時、これを止めるため、末席から大声で注意も出来かねるので、注意喚起の意味で、目に力を込めて、彼を沈黙させるために使ったもので、私の目が鮫に似ているのではないことをこの際申し上げておく。」  
 「北先生は夜いっぱりの朝寝坊型で、夜は何時まででも起きていたように思う。（中略）先生は私をよく寝る男と書いておられるが、たまたま夜いっぱり先生が起きている時間に私が寝ており、先生が起きだしてくる頃には、私は当直勤務中だっただけのことで、入港中の当直時以外は夜の二時でも三時でも、どこへでもおつきあいしてあげたことを忘れてもらっては困ると申し上げたい。」  
 「北さんのメモ魔ぶりは常軌を逸しているのではないかとと思われるほど克明かつ執拗かつ小児的であった。そしてその記録も新聞活字なみの細かい字で、びっしり書き込んでいかれるその作業ぶりはとうていなみの人間の出来る業ではない。これを毎日毎晩つづけるのであるからただただあきればかりであった。」  
 「小児的という事は彼の問題に対する質問ぶりが、智慧のつきはじめた幼児がなぜどうしてと親を困らせ

るあのやり方で、(中略)、専門家の癖になぜ説明できないのかと怒るのには、ただただ参ったであった。例えば船がある針路である時間航走してある岬沖を通過したとすると、そのことについて、〔問〕針路は何によって保持できたか？〔答〕羅針盤によって。〔問〕羅針盤はなぜ北を指すのか？〔答〕地球は一つの磁体であるため。〔問〕地球はなぜ磁体なのか？〔答〕わかりません。〔問〕バカモン！ とくるのである。何事によらずこの調子で攻めてくるのであるから文字通り閉口せざるを得ない。」<sup>50)</sup>

航海中の北杜夫をもっとも身近に観察しえた航海士からも、独語癖や飲酒傾向、夜型生活、突飛な言動、メモ魔ぶり、小児的な質問、易怒性などが指摘されている。

## 5. 結語

長女の由香と北杜夫の対談から、躁うつ病と創作に関連した内容を紹介する（下線は筆者による）。

「由香：でも、原稿はうつ病のときの方がいいものを書いてたでしょう？

北：いや、そんなことはない。

由香：躁病の方がいいの？

北：躁病の方が原稿のできはいい。

由香：ほんとかなあ。担当の編集者の方は、『躁病のときは書きなぐっているから、あんまりいいものは書けない』とおっしゃってました。

北：いやいや。うつ病のときはほとんどかけない、どんよりして。

由香：うつ病から躁病に行く途中の軽躁病のときがいいのかもね。躁病のピークになると…。

北：やっぱりでたらめになる（笑）

由香：あと借金の返済でエッセイを書かなくちゃいけなくて忙しくなっちゃった。『楡家の人びと』はいつ書いたの？ パパが何歳ぐらいのとき？

北：『どくとりマンボウ航海記』の次だね。結婚してすぐに、昔の取材を開始して。

由香：じゃあ、やっぱり躁うつ病になってる頃なのね。

北：いや、まだなってる。連日、徹夜して2階から降りてくると近所の鶏が鳴いてたなあ。」<sup>26)</sup>

喜美子夫人の回想。「結婚直後の夏、軽井沢の貸別荘で、主人は『楡家の人びと』を猛烈な勢いで書き進めていました。」「毎日、明け方まで書いていて、仕事を終えてから2階から降りてくると、隣家のニワトリが決まって鳴くらしいのです。情熱があつて、若くて体力があつたからそこまで頑張れたのだと思います。」<sup>29, 43)</sup>

作家・北杜夫の大成には、「若さ」「体力」「情熱」「友人」「家族」「時代」など、幾つもの要素が関与している。そして本論では、これまで顕在発症とみなされてきた時期よりも前に気分変動が存在し、それが創作の一因として関与していた可能性を考察した。北杜夫の代表作といわれる『どくとりマンボウ航海記』『幽霊』『楡家の人びと』『船乗りクブクブの冒険』が、この顕在発症前とされる時期に創作されていることは、双極性障害と創作との関係を考察するうえで、重要な

論点であると考ええる。

### 謝辞

本論作成にあたり、貴重なご助言を賜りました竹内正先生、ご高閲いただきました齋藤国夫先生に深謝申し上げます。また本論寄稿にあたり御承諾を賜りました齋藤喜美子様深く感謝申し上げます。

本論に関連して開示すべき利益相反はない。本研究はJSPS科研費 JP16K13194の助成を受けたものである。

注1：例えば、顕在発症前の北杜夫を知る人物として、旧制松本高校の先輩・小谷隆一（1924-2006年）がいる。小説『白きたおやかな峰』<sup>10)</sup>は、小谷を隊長として北が同行したカラコルム・ディラン峰の海外遠征登山（1965年）の体験を題材としている。小谷によると、1962年に京都で再会した北にヒマラヤ登山の話をしたところ、北は自分も一緒に行きたいと述べたが、1964年の入山許可が下りた時点で北に連絡すると、北は「そんな約束をした覚えがない」と返答したという。最終的に小谷の説得で北は承諾するのだが、これを振り返って小谷は、「おそらく京都で会った二年前は躁期であり、許可のおりたこの時は鬱期だったのだろう。」と述べている<sup>33)</sup>。これも顕在発症（1966年）より前の気分変動を示唆する逸話である。

注2：ただし家族の認識・記憶も実際とはずれている可能性がある。最初の躁状態は、喜美子夫人の記憶では昭和42年-43年（1967年-68年）頃とされているが<sup>29, 43)</sup>、正確には昭和41年4月（1966年：39歳時）である<sup>17, 45)</sup>。長女・由香（1962年4月9日生）の小学校1年は1969年となるため、これもずれがあり、顕在化した後の躁病エピソードを回想しているのではないかと考えられる。北自身の回想では、「娘が小学1年生の秋ごろだったが、私の狂気にたまりかねた妻は娘を連れて電車で30分ばかり離れたところにある実家に逃げてしまった。娘は公立の小学校でありながら、親の躁病の騒動のため、電車通学をさせられたのである。」「私が41歳のある晩、突如として激昂し、『好き勝手に生きたいから、頼むから実家に帰ってくれ!』と騒ぎ出し、当時、妻はそれが躁病とは知らず、さぞ不安な毎日であったことだろう。」<sup>23)</sup>とある。また長女・由香も別の自著で、「実は私が幼稚園の頃、父は躁鬱病を発症していたらしいが、それが顕著に表れたのは私が小学校1年の時だった。」<sup>48)</sup>と著している。

注3：水産庁の漁業調査船（照洋丸）の船医となり（31歳時）、1958年11月に出航、アジア、アフリカ、ヨーロッパの各地に寄港し、1959年4月帰国。航海中に、港々から『船上にて』<sup>30)</sup>という便りを同人誌「文藝首都」に寄稿（1959年1月号-5月号に掲載）。この体験を基にした旅行記『どくとるマンボウ航海記』（1960年刊）<sup>8)</sup>はベストセラーとなった。

注4：辻邦生（1925-1999）：東京生れ。1957年から1961年までフランスに留学。1963年、長篇

『廻廊にて』を上梓し、近代文学賞を受賞。この後、1968年の『安土往還記』（芸術選奨新人賞）や1972年に『背教者ユリアヌス』（毎日芸術賞）等、独自の歴史小説を次々と発表。1995年には『西行花伝』により谷崎潤一郎賞受賞。他の作品に『嵯峨野明月記』『春の戴冠』等<sup>27)</sup>。北杜夫は『船上にて』<sup>30)</sup>のなかで辻邦生を、「彼は私の小説をほめてくれる地球上における稀有なる一人である」と書いている。

注5：「ズク」は、長野県方言（信州弁）のひとつで、やる気や意欲といった意。「ずくが出ない」（意欲がわかない）「ずくを出す」（やる気を出す）などの形で用いる。北による解説は以下。「『ズク』という信州弁は『まめ』くらいの意で、うんと働いたりすると、『あいつはズクがある』というふうを使う。」<sup>11)</sup>

注6：例えば、『どくとるマンボウ青春記』の一節。「むかしはなんでもかんでも神経衰弱と呼んだ。神経衰弱の大安売りである。（中略）実際、3年生の後半ともなれば、どこへ行っても神経衰弱が大流行であった。友人と会って、『どうだ、近ごろ？』『うん、ちょっと神経衰弱気味なのだ』また別の友人と会い、『しばらくだな。あまり学校に出てこないようだが』『どうも神経衰弱だね。本物のまっさらな神経衰弱なのだ』<sup>11)</sup>

注7：『狂詩』は、「いつ発狂するかわからない精神病科専攻の医学生 of 主人公の手記」<sup>39)</sup>という形で物語が構成されている。奥野健男は本作を、「芥川龍之介の『或る阿呆の一生』『歯車』や太宰治の『人間失格』に似たスタイルをとっている」と指摘している<sup>39)</sup>。北杜夫自身の回想は以下。「日本の作家じゃ芥川が一番好きだったのね。で、大学のときに『歯車』を読み返したらね、発狂の恐怖に襲われたんだ。若い頃はぼくもナーバスで、才能があったんだな。歳をとったらだんだんだめになった。」<sup>31)</sup>「芥川の『歯車』とか『或る阿呆の一生』とかを繰り返し読み、彼の『発狂の恐怖』や『漠とした不安』を自分のことのように感じ受け止めた。」<sup>32)</sup>「『歯車』は三年生のときに読んだと思うが、私自身が神経衰弱的な状態にあったせいか、その内容にとっても共感するところがあった。（中略）病気かそうでないか、不安定な境界線上をさまよう気持ちはよくわかり、この作品には、とても強い印象を受けた。」<sup>24)</sup>

注8：学生時代から晩年まで、独語癖がある。「愛してる！」「たすけてー」「助けてくれ！」「神よ！」「無礼な！」「ブレイモノ（無礼者）！」「けしからん」「テテシャン」「可愛いなー」等<sup>15, 18, 22, 26, 40, 47)</sup>。これを突如として叫ぶ（奇声を発する）。

注9：「彼が“マンボウ航海”の途中、パリの私の下宿に寄った際のエピソードはその航海記のなかに詳しいが、事実、あのとき、北がル・アーヴル行きの列車に乗り遅れ、見送りに行った私のほうが呆然としているのを、『平気、平気』と言って肩を叩いて、『作家というのは何が起こってもかまわないんだ。すべて書いてやれるからね』と力づけてくれたのは、北のほうだった。私は、いまも、あのときの彼の言葉が、はっきり耳に残っている。それは、当時さまざまな問題で思い悩んでいた私に、啓示のように閃いた言葉だった。この言葉のなかには、小説家の本質がすべて含まれているばかりでなく、人間が生きるに際しての余裕と知恵が、はからずも、生きたかたちとして与えられていたのである。もっとも、昨年



パリに現れたときには躁期に当たっていて、シャンゼリゼーの真ん中で『アイ・アム・ア・ヴィップ』と怒鳴られて、私は周章狼狽した。たしかに、躁期の北杜夫には、私など常人にはついてゆけぬ何か壮大な途方もなさがあるのである。(もつとも、鬱期の彼は、アンゴラ兎のようにおとなしく上品で、気弱になる。) だが私は、そのために、いっそう北杜夫の才能を信じたい気持ちがする。私は、そうした壮大な北杜夫と世界漫遊をやって、それこそガルガンチュワそこのけの生を真に生きられたら、どんなに素晴らしいことだろうと思う。」<sup>12)</sup>

注10: 「さて8時50分の汽車でル・アーブルに帰ろうと駅まで送ってもらってきたところ、その汽車は日曜にしかないという。さすがにびっくりし、次にはこれぞ天の配慮かと思ったが、船は明朝出航なので調べてみると朝7時に急行がある。大抵間にあうだろうし、もし船が待っていなければそれはもう私の責任ではない。船に電報を打っておいてから、すっかり陽気になり、また葡萄酒など買い込んでTのアパートに戻った。」<sup>8)</sup>

注11: 「ところがその帰途、メトロの中で、(中略) 乗客たちがしきりと私のほうを窺う。睨みつけてやると慌てて目をそらしてしまう。あとでTが言った。『君はあんなでかい声でしゃべるし、葡萄酒のびんは抱えているし、アル中と間違えられたんだよ』」<sup>8)</sup>

注12: 小説『夜と霧の隅で』(1960年: 芥川賞受賞作) のこと。

注13: 当時、北杜夫は兄・斎藤茂太宅に居候していた。同居していた甥<sup>47)</sup>と叔父である北自身をモチーフとしたのが、小説『ぼくのおじさん』<sup>14)</sup>。本小説は2016年に映画化された。

注14: 1960年は、『どくとるマンボウ航海記』が中央公論社より、『夜と霧の隅で』が新潮社より出版され、前書がベストセラーに、後書が芥川賞を受賞した。中央公論社と新潮社が北杜夫作品の主要な出版元。

注15: 正確には、東映動画長篇第一作が『白蛇伝』(1958年)、第二作が『少年猿飛佐助』(1959年)、第三作が『西遊記』(1960年)、第四作が『安寿と厨子王丸』(1961年)、第五作が『シンドバッドの冒険』(1962年: 手塚治虫・北杜夫脚本)<sup>42)</sup>。ちなみに日本初のカラー長篇漫画映画『白蛇伝』をみた当時高校生の宮崎駿<sup>52)</sup>は、1963年に学習院大学を卒業して東映動画に入社する<sup>42)</sup>。

注16: 「その原因は私でも不明なのだが、私は躁期になると、しきりと作家以外の職業になりたがる。(中略) 同時に、なにか別の職業で金を稼ぐにしても、日本円でなく外貨を稼ごうと企むのも、私の病である。(中略) そのため、ずっと前の躁病期、私はだしぬけに罐詰輸出業者になろうとした。幾つかのアイデアを考えたが、その一つは石ころの罐詰で、一つは塩水の罐詰である。」<sup>13)</sup> 照洋丸での航海中にも、「私は外貨をかせいであげようと思つて、リュウベックでもスピード宝くじを大分買ったのである。(中略) むろんのこと、みんな外れてしまった。」<sup>30)</sup>との逸話がある。

注17: 北杜夫が72歳時の記述。「心の中でひそかに、『ギャンブルをやるエネルギーくらいないと作家はものを書けない』とは思っていた。(中略) 競馬をやったおかげで、私はたった半日にして23枚の短篇をでっちあげてしまった。我ながら恐るべき男と言わねばならぬ。」<sup>25)</sup>

- 注18：なだいなだと北杜夫の対談の一節。「なだ：きみがそれ（同人誌の資金）を全部持って競馬に行くと言い出した。おれに任せれば競馬で何倍かにしてやるって。北：やっぱりあの頃から異常だったのかなあ（笑）。」<sup>31)</sup>
- 注19：相場均（1924-1976年）は心理学者で早稲田大学教授などを歴任。慶應義塾大学病院神経科の勤務歴があり、北にとっては医局の先輩。『どくとのマンボウ航海記』<sup>8)</sup>ではAで登場。「ハンブルクにはAともベントさんとも知り合いのY氏という日本人がおり、（中略）Aに紹介の手紙を出してもらっていた。（中略）Y氏からはカユいところを孫の手10本でひっかくほどの世話を受けた」。Y氏は横山薫二氏で、その長女・喜美子と北杜夫は結婚する<sup>45)</sup>。
- 注20：北杜夫の「サトリをひらいた」という感覚に関連して、「悟り体験」という精神医学用語の存在を指摘しておく。「宗教体験の一つで、至福や啓示の強い感情が急激にわき起こる体験。精神病理現象としては、レオンハルト(K. Leonhard)が非定型精神病の一つにあげた不安-恍惚精神病の恍惚性の病相でみられる。患者は、恍惚性の気分変調を基礎として、非合理的な観念を悟りや啓示に帰着させる。」<sup>37)</sup>
- 注21：文献28では、10月末に執筆開始、12月9日に脱稿となっているが、文献21では「12月から翌年1月末にかけて300枚を書き下ろした」とある。文献17では、「1日20枚」「およそ2カ月」で書き下ろしたとあり、また文献25では、「くわしい『航海日誌』があったし、1日に20枚以上も書けた。（中略）多分1カ月半くらいで書き終わったと思う。ごく執筆ののろかった私にとっては意外なことであった。」と振り返っている。

## 文献

- 1) Akiskal, HS. : The bipolar spectrum: new concepts in classification and diagnosis. In: Grinspoon L (ed). Psychiatry Update. The American Psychiatric Association Annual Review Vol II. American Psychiatric Press, Washington DC, p.271-292,338-341,1983.
- 2) Andreasen NC: Creativity and mental illness: Prevalence rates in writers and their first-degree relatives. Am J Psychiatry,144:1288-1292, 1987.
- 3) Andreasen NC, Glick ID: Bipolar affective disorder and creativity: implications and clinical management. Compr Psychiatry, 29:207-217, 1988
- 4) Andreasen NC: The Creating Brain: The Neuroscience of Genius, The Dane Press, New York/Washington,D.C. 2005. (長野敬、太田英彦訳：天才の脳科学。創造性はいかに創られるか。青土社、東京、2007.)
- 5) Ghaemi, SM., Boiman, EE., Goodwin, FK.: Diagnosing bipolar disorder and the effect of antidepressants: a naturalistic study. J Clin Psychiatry, 61 ; 804-808, 2000.
- 6) Healy, D. : MANIA: A Short History of Bipolar Disorder. The Johns Hopkins University Press, Baltimore, 2008. (江口重幸監訳、坂本響子訳：双極性障害の時代。——マニーからバイポーラーへ。みすず書房、東京、2012.)
- 7) Hirschfeld, RMA., Lewis, L., Vomik, LA.: Perceptions and Impact of Bipolar Disorder:

How Far Have We Really Come? Results of the National Depressive and Manic-Depressive Association 2000 Survey of Individuals With Bipolar Disorder. *J Clin Psychiatry*, 64:161-174,2003.

- 8) 北杜夫：どくとるマンボウ航海記. 中央公論社, 東京, 1960.
- 9) 北杜夫：船乗りクプクプの冒険. 集英社, 東京, 1962.
- 10) 北杜夫：白きたおやかな峰. 新潮社, 東京, 1966.
- 11) 北杜夫：どくとるマンボウ青春記. 中央公論社, 東京, 1968.
- 12) 北杜夫、辻邦生：若き日と文学と —北杜夫・辻邦生対談. 中央公論社, 東京, 1970.
- 13) 北杜夫：月と10セント —マンボウ赤毛布米国旅行記. 朝日新聞社, 東京, 1971.
- 14) 北杜夫：ぼくのおじさん. 旺文社, 東京, 1972.
- 15) 北杜夫、遠藤周作：狐狸庵vsマンボウ. 講談社, 東京, 1974.
- 16) 北杜夫：どくとるマンボウ追想記. 中央公論社, 東京, 1976.
- 17) 北杜夫：北杜夫による北杜夫. 青銅社, 東京, 1981.
- 18) 北杜夫：マンボウ交友録. 読売新聞社, 東京, 1982.
- 19) 北杜夫：ぴーぷる最前線 北杜夫. 福武書店, 東京, 1984.
- 20) 北杜夫：或る青春の日記. 中央公論社, 東京, 1988.
- 21) 北杜夫：どくとるマンボウ医局記. 中央公論社, 東京, 1993.
- 22) 北杜夫：マンボウ遺言状. 新潮社, 東京, 2001.
- 23) 北杜夫：マンボウ愛妻記. 講談社, 東京, 2001.
- 24) 北杜夫：別冊宝島 作家たちが読んだ芥川龍之介. 宝島社, 東京, 2007.
- 25) 北杜夫：マンボウ最後の大バクチ. 新潮社, 東京, 2009.
- 26) 北杜夫、斎藤由香：パパは楽しい躁うつ病. 朝日新聞出版, 東京, 2009.
- 27) 北杜夫、辻邦生：若き日の友情 辻邦生・北杜夫往復書簡. 新潮社, 東京, 2010.
- 28) 北杜夫：見知らぬ国へ. 新潮社, 東京, 2012.
- 29) 北杜夫：マンボウ最後の家族旅行. 実業之日本社, 東京, 2012.
- 30) 北杜夫：船上にて. 文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館. 河出書房新社, 東京, 2012.
- 31) 北杜夫、なだいなだ：遅まきの青春、ぼくらの医局時代. 文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館. 河出書房新社, 東京, 2012.
- 32) 北杜夫：いつもそばに本が. ワイズ出版, 東京, 2012.
- 33) 小谷隆一：山なみ帖. 茗溪堂, 東京, 1981.
- 34) 前田彰：北杜夫異聞 その躁病のすべて. 別冊新評 北杜夫の世界. 新評社, 東京, 1975.
- 35) 宮脇俊三：どくとるマンボウの誕生. 世田谷文学館編：北杜夫展——世田谷文学館開館5周年記念世田谷文学館, 東京, 2000.
- 36) 本村啓介：疾患概念の変遷 DSM-III以降. 神庭重信総編集：DSM-5を読み解く3 双極性障害および関連障害群、抑うつ障害群、睡眠-覚醒障害群. pp. 53-66, 中山書店, 東京, 2014.

- 37) 中谷陽二：「悟り体験」。新版精神医学事典，弘文堂，東京，1993.
- 38) 奥野健男：日本文学史 近代から現代へ。中央公論新社，東京，1970.
- 39) 奥野健男：北杜夫の文学世界。中央公論社，東京，1978.
- 40) 奥野健男：中学時代からの北杜夫。文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館。河出書房新社，東京，2012.
- 41) 大前晋：診断概念の変遷 DSM-III導入まで。神庭重信総編集：DSM-5を読み解く3 双極性障害および関連障害群、抑うつ障害群、睡眠-覚醒障害群。pp. 11-52，中山書店，東京，2014.
- 42) 大塚康生：作画汗まみれ。増補改訂版。徳間書店，東京，2001.
- 43) 斎藤喜美子：マンボウ家の50年。北杜夫著「マンボウ最後の家族旅行」。実業之日本社，東京，pp. 155-181，2012.
- 44) 斎藤喜美子：わが夫・北杜夫。別冊宝島編集部編「北杜夫 マンボウ文学読本」。宝島社，東京，pp. 16-20，2016.
- 45) 斎藤国夫・編：略年譜「北杜夫展」。世田谷文学館編：北杜夫展——世田谷文学館開館5周年記念世田谷文学館，東京，2000.
- 46) 斎藤国夫：新発見！北杜夫孵化直前の〈宗吉ワールド〉。文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館（増補版）。河出書房新社，東京，2016.
- 47) 斎藤章二：愛すべき躁鬱病の叔父。文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館。河出書房新社，東京，2012.
- 48) 斎藤由香：猛女とよばれた淑女 祖母・齋藤輝子の生き方。新潮社，東京，2008.
- 49) 坂元薫：双極性障害の診断 過小診断と過剰診断をめぐる問題。Depression Frontier, 11; 9-13, 2013.
- 50) 眞後智一：照洋丸の本当のどくとるマンボウ傍観記 —北杜夫氏と同船室ですごした6か月間—。別冊新評 北杜夫の世界。新評社，東京，1975.
- 51) 高橋正雄：精神医学的にみた近代日本文学（第23報）北杜夫。聖マリアンナ医学研究誌, 17; 34-40, 2017.
- 52) 高橋徹，松下正明：宮崎駿にみる身体感覚 —体感体験と創造性—。病跡誌, 82; 75-86, 2011.
- 53) 高橋徹：オピニオン「名は体を表す」。精神科治療学, 28; 1104-8, 2013.
- 54) 高橋 徹、多田はるか、鈴木一浩ほか：思春期・青年期2例からみる「診断保留」の意義 —疾患概念の変遷と治療介入の柔軟性—。臨床精神医学, 44; 1179-1185, 2015.
- 55) 高橋徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 —双極性障害の診断。病跡誌, 95; 58-74, 2018.

## 関連書籍

1. 辻邦生・北杜夫『若き日の友情 辻邦生・北杜夫往復書簡』（新潮社, 2012）  
（信州大学附属図書館「北杜夫文庫」所蔵）
2. 北杜夫、辻邦生『北杜夫・辻邦生集 筑摩現代文学大系87』（筑摩書房, 1976）  
（信州大学附属図書館「北杜夫文庫」所蔵）



## 3. 北杜夫『どくとるマンボウ航海記』（中央公論社, 1960）

(信州大学附属図書館所蔵)

A：表紙「スエズ運河をゆく照洋丸」

B：著者紹介（表紙裏）

C：井伏鱒二評（裏表紙）

D：曾野綾子評（裏表紙裏）

E：どくとるマンボウ往路（前見返し）

F：どくとるマンボウ復路（後ろ見返し）



A



照洋丸船上の著者

**著者紹介**（きた・もりお） 本名、斎藤宗吉。1927年、東京に生まれた。松本高校を経て東北大学医学部を卒業、現在、慶応義塾大学附属病院神経科教室助手として精神病理学を専攻している。そのかわら「文芸首都」「近代文学」「新潮」等に創作を発表、特に「谿間にて」は昭和34年上期の芥川賞の有力候補であった。著書に「幽霊」がある。昆虫の採集と漫画本を読むことを趣味としている。

B

**井伏鱒二氏評**  
北杜夫といふ人の作品は、去年、芥川賞候補になった「谿間にて」を初めて読んだ。詩情を内にひそめた異色ある作家だと思った。今度はこの航海記を読んで、神経科の若いお医者であることを知った。しかし、これはただの記録ではなく、また、ただの文明批評でもない。潤達自在な文章で船と海と港を生き生きと描き、我々を幻妙な冒険物語の世界に誘ってくれる。斬新な記録文学だと思ふ。

C

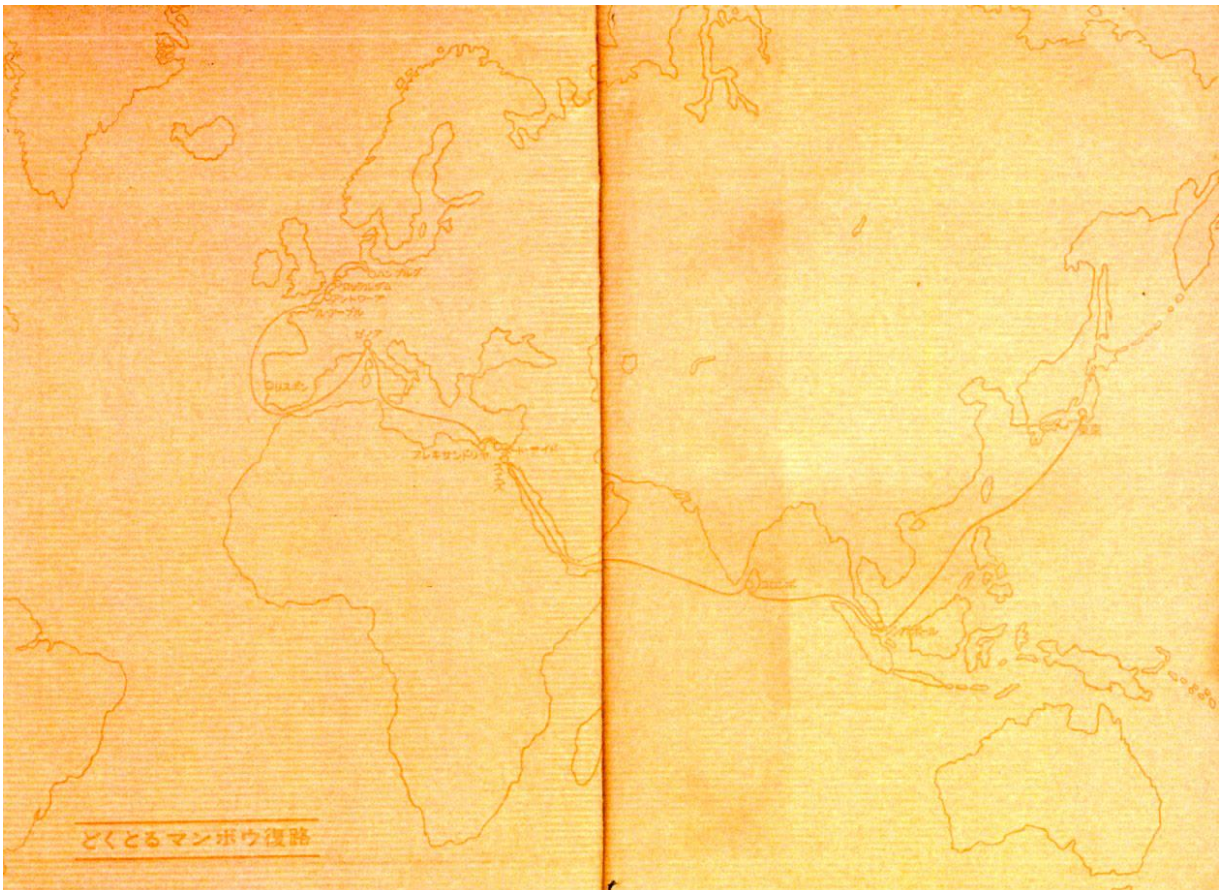
**曾野綾子さんの読後感**  
いままで日本語で書かれた航海記のなかで、最高に面白い作品の一つである。北杜夫という方は、痩せた胃下垂型の胆力のなさそうなお医者様だけれど、このユウヅウムゲ・センペンパンカの才能のふくれ上り方は正にマンボウ的であることがわかった。  
とにかく、本当かと思つて読んでみると、どうも嘘くさい。本当としたら嘘みたいにくさくさである。創作力とは、そういうものに違くない。ところが嘘だろうと思つて読んでみると、どうも本當みたいな気もしてくる。物事を適確につかむ眼が光っているからだ。虚々実々、マンボウ先生の筆先三寸の船に乗つて、春の一日をまったく退屈せずに過してしまつた。

D

作家・北杜夫と躁うつ病 — 顕在発症前エピソードと『どくとるマンボウ航海記』 —



E



F